



認知症の方を支えるために介護支援専門員としてできること ～いつ学ぶの？今でしょ！～

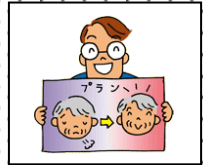
第10回山口県ケアマネジメント研究大会
平成25年11月2日（土）
山口県セミナーパークにて



スタッフ一同でお・も・て・な・し



山口県介護支援 専門員協会だより



平成25年度
第2号
広報事業部

去る、平成二十五年十一月二日（土）に、第十回山口県ケアマネジメント研究大会を開催致しました。三連休の初日にもかかわらず、約二百四十名の方々に参加していただきました。

今回の記念すべき十回大会は、「認知症の方を支えるために介護支援専門員としてできること～いつ学ぶの？今でしょ！」がテーマです。厚生省の報告によると、六十五歳以上の高齢者のうち認知症の人は推計十五％で、昨年度時点で四百六十二万人にのぼることが分かりました。さらに、軽度認知障害と呼ばれる「予備軍」も約四百万人いることも分かっています。

認知症の方を地域でも支えていこうという声の中で、地域包括ケアシステムでも、認知症ケアの取り組みがうたわれているところですが、今後、私たち介護支援専門員は、認知症についての専門的知識を高めていく必要があります。

今回の研究大会では、認知症の方を支える専門職としてのスキルアップを図ることを目的としました。今大会に参加していただいた全ての方が、これからどう認知症の方と向き合っていけばよいのかを考えるきっかけ作りになったことを期待しています。

「いつ学ぶの？今でしょ！」

◆ 基調講演

「地域包括ケアシステムにおけるかかりつけ医の役割・在宅ケア・認知症医療から見る連携のインテグレーション」

NPO法人 広島県介護支援専門員協会

副理事長 落久保 裕之 氏

今大会の基調講演には、広島市で、落久保外科循環器科クリニックを開業されております、落久保裕之院長をお招きしました。地域包括ケアシステムの中で、地域の医師が果たす役割について、また、在宅ケアや認知症医療におけるチームケアの重要性などについて講演されました。

まず最初に、地域包括ケアシステムの仕組みや未来像などについて話されました。地域包括ケアシステムには、「介護」、「医療」、「予防」、「住まい」、「生活支援・福祉サービス」の五つの構成要素があります。その中でも「住まい」は最も基本的な基盤であると話されました。単身世帯が増えていく中で、孤独死という問題がクローズアップされています。特に単身世帯の急増が予想される都市部においては、住まいの確保は急務であると説明されました。また、都市部や地域によるケアの違いも見られ、それぞれの地域の

実情に応じた対策が必要であるとも話されました。しかし、サービスにより全てをカバーすることは難しく、それにはマンパワーの効率化や、それぞれの地域にある様々なインフォーマルなサービスなどを活用することが必要であると話されました。地域包括ケアシステムは、「可能な限り住み慣れた地域で生活を継続することができるような包括的な支援・サービス提供体制の構築」を目指しています。今後、単身世帯や高齢者のみの世帯が主流になる中で、在宅生活を選択することの意味を、本人家族が理解し、そのための心構えを持つことも重要であると話されました。本人・家族と地域包括ケアシステムの様々なサービスをコーディネートする、私たち介護支援専門員の果たすべき役割が増々大きくなっていくと考えられます。

次に、かかりつけ医の地域での位置づけについて話されました。在宅医療に関するニーズが高まっている中でのかかりつけ医や訪問看護の役割、重要性について説明されました。また、在宅医療で最も大切なチームケアについては、「リング（連携）」のレベルから、インテグレーション（統合）」の水準に引き上げていく必要があるとされ、そのためにも顔の見える関係作りが必要不可欠であると話

されました。在宅医療での終末期においては、いかにその人の歩んできた人生（物語）の一員になれるかが大切です。落久保氏自身の闘病、入院経験为例に出され、家で生活することの安心感や、家族の一員に戻って来られたことの安心感が何よりもうれしいことであったことも話されました。

また、今回の大会テーマでもある、認知症の方へのケアについても、やはり大切なのは「チームケア」であると話されました。私たち介護支援専門員にとって、認知症の基本的知識や症状に対する基本的なケアの方法を知っておくことは重要なことです。しかし、他職種の研修制度と比べると、現在の介護支援専門員の研修体制の中には認知症のケアについての研修があまり組み込まれていないことを指摘されました。今後は、認知症ケアについての研修が必須になっていくと考えられます。認知症の方を支援する中では、本人の思い、家族の思い、医師の思い、ケアマネの思いなどをどのようにケアの方針につなげていくのが難しいことです。それにはやはり、カンファレンスの積み重ね、それも顔を合わせて行っていくことが大切だと話されました。

最後に、「連携のインテグレーション」について説明されました。連携は、「リン

グーシ（連絡）のレベルから、定期的な情報共有を行う「コーディネートション」のレベルに、さらには、情報の一元化による「インテグレーション（統合）」の水準に引き上げていく。文面だけ見ると非常に難しそうな内容ですが、広島市で実際に実施されている、「在宅ケア連携ノート」を例に挙げて説明されました。ノートには本人が目指すべき姿の写真を入れたり、本人・家族や多職種が記入すること、同じ目標に進んでいける効果を果たしています。まさに、協働をつなぐ（インテグレート）連携ノートなのです。それにより、本人・家族を多職種が輪で支援しているのではなくて、網（下に落ちることなく、どこかに引っかかるイメージ）で支援している状況になっていくことを説明されました。つまりこれからは、「支援の輪」から「支援の網」に変えていくことが大切なことであると話されました。

先述したように、いかにしてその方の物語の一員になれるかが、チームケアの醍醐味でもあります。私たちは、「人を支援し、人が喜べる支援を行う」、それが私たちにとって一番の喜びにつながるのではないのでしょうか、と締め括られました。

◆今回、記念講演をしていただいた、落久保先生に、ケアマネジメント研究大会についての感想をいただきました。

「今大会が十回目の記念大会ということですが、このような大会を継続されていることが一番すばらしいことだと思えます。また、毎年テーマを変えられたり、今大会のようにお楽しみイベントなどを企画されていることも大変興味深く思いました。」

協会の会員にとっては、毎年このような研究大会が開催されるということに安心感を感じているのではないかと思います。十年間継続されている、山口県介護支援専門員協会の組織力というものを感じています。」

◆山口県で頑張っている介護支援専門員に一言お願いします。

「チームケアの醍醐味を感じてほしいと思います。ケアは何かと結果を求められますが、その過程や振り返りも大切にしてください。」

◆落久保先生、どうもありがとうございます！

◆研究大会ダイジェスト

開会式後には、今大会からの新たな試みとして、永年表彰式を行いました。長年、介護支援専門員として活躍されてきた方々を、県協会から何らかの形で表彰したいという思いがあり、平成二十五年度は、七つの地域から二十名の表彰者となりました。県協会の佐々木会長より、代表者に表彰状と記念品を手渡し、今後の増々のご活躍をお祈り致しました。今回代表で登壇された、アイユウの苑に勤務されている、清水朱美様に感想を伺いました。

「気が付いたら十年が過ぎていたという感じです。今回、表彰していただいたことについては、うれしく思うと同時に、今後の仕事をしていく上でのモチベーションにもつながってくると思えます。これから、介護支援専門員としての自己研鑽をしていきながら、利用者様のために頑張っていきたいと思えます。」

表彰式後の、落久保先生の基調講演に続き、今回も、小野薬品工業さんによる、ランチョンセミナーが行われました。「アルツハイマー型認知症の病態と薬物療

法」という表題のもと、アルツハイマー型認知症の基本的知識や、その治療薬などについて講演されました。また、セミナー参加者には小野薬品さんよりお弁当の提供もあり、皆さんおいしく召し上がられていました。

午後からは、五つの地域からの研究発表が行われました。



◇「できる限り、住み慣れた地域で過ごしたい」を支援するために（柳井地域）

社会福祉法人 恒和会 ゆうわ苑
発表者 硯谷 香里

◇在宅生活を支える私たち「ケアマネ」が見えてきたこと

山陽小野田市介護支援専門員連絡協議会
発表者 山田 起代

◇事例検討会への参加を通じた、地域の介護支援専門員のスキルアップへの取り組みについて

萩広域介護支援専門員連絡協議会
発表者 内田 陽介

◇高次脳機能障害のご本人らしさと、ご本人の笑顔を取り戻すまで

チーム下松 発表者 田邊 美紀

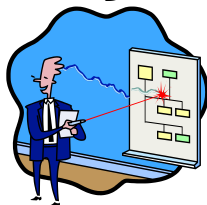
◇認知症高齢者と入所動機の関係性についての調査報告 いつ入所するの？まだでしょく

山口市介護支援専門員協会
発表者 小峯 千春

事例を通じて、ご本人や家族にどのように関わっていき、どのように変わっていったか、アンケート実施による結果分析の報告、また、地域での介護支援専門員のスキルアップのための取り組みなどについて、各地域より発表があり、会場からは参加者からの熱心な質問も見られていました。

各地域の発表には、助言者の落久保先生より講評をしていただきました。基調講演でも話されていたように、やはり「チームケア」が大切であるということと、介護支援専門員としてのスキルアップが必要であるということでした。

自分のスキルの限界を知る事も必要であり、そのためには、適切に自己評価を行うったり、他の介護支援専門員に自分のスキルを評価してもらうことも必要ではないだろうか、と話されていました。



さあ、今大会の最後を飾るのは、組織総務部の二年越しの念願企画、「大抽選会」です！進行は県協会の宴会部長（？）、いや、組織総務部の松ちゃんこと松谷部長です。この企画を実現させるために、昨年度から地域の福祉祭りやフリーマーケットなどに参加し、県協会の活動紹介を行うとともに、出店ブースにてちくわを売りながら、景品調達の資金を集めたことを涙ながらに（笑）語っていました。また、以前広報部の方で取材をさせていただいた、厚狭の永山酒造様よりお酒をいただきました。この紙面にてお礼を申し上げます。



今回の抽選会は二種類あり、ひとつは会員限定のホームページからの事前エントリーによる抽選会と、当日の大会参加者全員による抽選会が行われました。落久保先生や研究発表の発表者の方々にも協力していただきながら、当選者の名前を呼び上げると、会場からは大きな歓声が上がっていました。見事、当選された皆様、おめでとうございます！

今後も県協会では、皆様楽しんでいただけるような企画も盛り込みながら、ケアマネジメント研究大会を開催していきたいと考えております。

たくさんの方にご参加いただきました

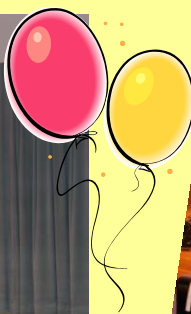


記念すべき第1回目の永年表彰です。



メーカーの出展ブース

ケアマネジメント研究大会 スタッフギャラリー!



宴会部長松ちゃん登場!!!

まさか当たるとは・・・ラッキーです!

Congratulation!!

会長、いいの引いて下さいね!

